

「必見!“選ばれる園”となるためのヒントを探る」が開催されました。

園長・施設長・主任講座を集合型研修の良さ(対話型、双方向性)を適宜取り入れて、オンラインで開催しました。

開催：[ライブ配信]令和3年8月30日
[ビデオ配信]令和3年9月6日～13日



プログラム

基調 講演

「次世代を見据えた園を創造する」

講師：馬場耕一郎先生（社会福祉法人友愛福祉会理事長、内閣府子ども・子育て本部上席政策調査員）



少子高齢化がますます進む日本では、入園児数の減少による定員割れや運営費の減収といった、経営上の問題に直面する園が増える予想されます。家庭とは異なる、「園ならではの役割」がさらに求められることとなります。選ばれる園になるには、保護者に向けた「園の情報の発信と更新」を積極的に行いつつ、園内では保育の土台となる「養護の担保」と「保育の質」を改めて見直すことが大切になると言われます。そうした中で、子どもたちが心身ともに充実した園生活を送るためのキーワードは「豊かさ」。今一度「自分たちの園の豊かさとは？」を考えることは、選ばれる園づくりのヒントにもつながる、と思います。

テーマ 1

「幼少期の『原体験』を豊かに ～季節の行事の役割～」

講師：すとうあさえ先生（童話作家、一般社団法人日本児童文芸家協会専務理事）

パソコンやスマートフォンが当たり前存在する現代の子どもたちは、自然にふれる原体験（＝五感を駆使した直接体験）が不足しがちです。日々の生活で体験する自然への「なぜ？ どうして？ すごい！ へ～！」という感動や驚き、小さな気づきの積み重ねが、子どもたちの「生きる力」を育む原体験として大切です。日本の年中行事は自然に根差したものが多く、原体験をつくるチャンスになります。行事の由来を子どもたちに教えることが目的ではありません。皆で端午の節句に花菖蒲の匂いをかいだり、七夕で笹の葉の揺れる音を聞いたりすることが原体験につながります。家庭の行事が減ってしまうなか、園の行事は今後ますます重要となってきます。



テーマ
2

「園が担う防災計画と地域連携について」

講師：国崎信江先生（危機管理アドバイザー、一般社団法人危機管理教育研究所代表）



子どもが安全に過ごすはずの園で、繰り返しおこる痛ましい事故。それを防止するためには、事故を他人事と思わずに、その教訓を自分たちの園運営に生かすことが大切です。例えば、社会的な事故や犯罪事案が起こったら、必ず園の危機管理対応マニュアルを見直し、園の特性を考慮したオンリーワンのマニュアルとしてわかりやすく作る必要があります。また、報道で見聞きした翌日にはミーティングを行って職員間で問題意識を共有することもすすめています。最近では自然災害発生時の対応について、私どもの研究所で考案した「ファーストミッションボックス」という手法が園でも有効であると注目されています。

座談会

「地域に必要とされる園とは…？」 「保護者に必要とされる園とは…？」

馬場先生

日々の散歩も地域とのつながりを深めるうえで大切です。防災訓練で炊き出しを行えば、食育や行事食とからめて地域と連携した活動ができます。

地域の防災訓練で、若い世代の参加が少なく残念という声をよく聴きます。そこで、地域と園が連携した「共同防災訓練」の日を作ると、保護者と高齢者との交流も生まれて有意義な活動になります。

すとう先生

地域に溶け込む保育として、地域のお祭りへの参加、栽培活動での収穫物のおすそわけなど、地域の人に向けた子どもたちの活動を掲示するなどの方法があります。

国崎先生



受講者のアンケートから

● 「一人一人」を強調されていることは、家庭での生活経験に差が背景にあること、保育所の役割は最もふさわしい生活の場でなければならないことを再確認できた。

● 家庭における日本の文化・行事などの継承がされなくなってきているのは、間違いなく感じる。だからこそ園で伝えることが大事だと思う。園での伝え方を見直していきたい。

● 防災、災害対策などは現在において大変重要なテーマであり、ファーストミッションボックスなどそのための手段、方法などが大変参考になった。勤務園でも早速取り入れてみたい。